

# 漢方薬処方指針

## 数万人の効き目分析へ

厚労省

「漢方」がどんな人に効きやすいのか、医師が判定に役立てる指針作りには、厚生労働省研究班が今年度から乗り出す。慶応大病院、富山大病院など11施設が3年計画で数万人分の患者データを蓄積。体

風邪、肩こり  
胃炎  
肝機能障害、食欲不振  
肥満症、高血圧症  
冷え性、更年期障害  
疲労倦怠、食欲不振  
便秘  
膀胱炎、腎炎

瀉  
中散  
柴胡湯  
防風通聖散  
當歸芍薬散  
十全大補湯  
藜蘆散  
安中散  
大柴胡湯  
防風通聖散  
當歸芍薬散  
十全大補湯  
藜蘆散

■代表的な漢方薬

質や症状などと、効果との間に一定のパターンを見つけることで、科学的根拠の発見と治療の標準化につなげる。

漢方は、西洋医学では治しにくい冷え性や、原因不明の体調不良の不定愁訴など、様々な症状を総合的に治せると期待される。胃潰瘍などに効く柴胡桂枝湯、インフルエンザに効く麻黄湯など、現在148品目に公的医療保険が適用され、年間の売上高は1千億円以上。医師の7割が処方しているという。

しかし、その効果について、医師の経験や患者の主観で判断することが少なくない。西洋医学の薬に比べて、科学的根拠の研究、蓄積が少

ない傾向がある。

厚生労働省研究班（主任研究者 渡辺賢治・慶応大漢方医学センター長）は患者の体質や症状などに応じて、薬を選ぶ判断材料を探ることにした。患者が受診の際、症状とその程度を0〜100のスケールで入力し、西洋医学と漢方の診断名や処方薬のデータも集める。慶応大ではすでに約5千件のデータを蓄積。にきびや汗を伴う冷え性は「漢方が効きにくい」ことが分かった。

慶応大の渡辺さんは「経験に基づき、伝統医学の匠の技について、きちんと科学的な根拠を示したい」と話している。（岡崎明子）